

第22回

函館港イルミネーション映画祭

第20回シナリオ大賞

函館市長賞〔グランプリ〕

2016

駆ける！駆ける！駆ける！

難波典子





【作者プロフィール】

なんば のりこ

岡山大学、東京大学で秘書として勤務する傍ら、シナリオセンターにて脚本を学ぶ。執筆した朗読劇が岡山にて上演される。S1シナリオグランプリ大賞受賞。シナリオと並行し、小説の執筆も始める。文芸賞奨励賞受賞。

【梗概】

高本凜（19）は函館大学の馬術部に入部する。担当となった馬ノラは凶暴な馬だった。噛まれても蹴られても凜はノラと向き合う。自暴自棄になっていた自分と嫌われ者のノラが似つかわしいと思っていた。部員との距離も縮まることはない。函館競馬場で練習を積む部員たち。凜はノラを乗りこなせないままだった。

夏休み。部員たちは函館フォームで合宿を行う。最終日、全員で野外乗馬に出ると凜の騎乗した馬が山の中を爆走する。凜にはそれを止める力はない。四年生の橘と一年生の河田が凜を追う。このまま手綱を離すと楽になれるかもしれない、頭をよぎつ

た瞬間、橘が凜の馬を止める。帰京した部員たちは大会までの最終調整に入る。凜が練習で障害を飛ぶとノラの足が添え木にかかり、ノラは転倒して骨折する。安楽死させられることになるノラ。凜も骨折している。ノラを連れて行こうとする橘を凜は必死で止めるがノラはトラックに積まれる。絶望する凜。部屋から出ることができなくなる。高校時代と同じように。

凜の部屋に河田が訪れる。河田は実家に戻り、豆腐屋を嗣ぐことにしたのだと言う。凜を好きだったことを告白する河田。橘もまた凜の部屋を訪れ、凜に言う。「卒業前の大会を見に来て欲しい」と。全国馬術大会で橘は三位に入賞する。身を隠し橘を見守る凜。二度と馬には触れないことを決意す

る。

後期授業が始まり暫く経ち、ようやく授業に復帰した日、橘は凧を講義室から強引に連れ出す。橘は自分に母親がいないこと、凧への気持ちを告げる。凧もまた高校時代に受けたいじめ、そのせいで祖母と亀を失ったことを話す。凧の過去を知り、橘は凧がなぜ人を拒絶していたのか納得する。橘は凧を牧場に連れて行く。そこにはノラの弟がいる。そして、厩舎の中には手術を受け、歩けるようになったノラが立っている。

【登場人物】

芦田大和 (18) 大学一年生 馬術部員

担当馬 蒼

高本 凜 (19) 大学一年生 馬術部員

桑野美優 (18) 大学一年生 馬術部員

担当馬 ノヲ

担当馬 スイ

橘 蓮 (22) 大学四年生 馬術部員

上園 健 (18) 大学一年生 馬術部員

担当馬 スイ

担当馬 ヒマル

河田悠斗 (19) 大学一年生 馬術部員

平山ゆかり (21) 大学四年生 馬術部員

担当馬 メグ

担当馬 ヒマル

松田大樹 (22) 大学四年生 馬術部員

柳 麗奈 (18) 大学一年生 凜の友人

担当馬 シロ

志乃 (70) 凜の祖母

小郷真琴 (22) 大学四年生 馬術部員

優花 凜の高校時代の親友

担当馬 マル

橋爪 凜の高校時代の同級生

牧野秀太郎 (21) 大学三年生 馬術部員

瀬田コーチ (45) 馬術部コーチ

担当馬 マッキー

宇木 琉 (21) 柳麗奈の先輩

池口麗子 (21) 大学三年生 馬術部員

高山 牧場オーナー

担当馬 シロ

○大平原

青空と大地が地平線で重なり合う。

彼方の小高い山々は秋色。

女が乗った馬が大地を駆ける。

女の後姿。

女の黒髪が風になびく。

女は馬をとめ、振り返る、その瞬間。

○同・厩舎・前（朝）

数頭の馬が繋がれ、部員たちは馬か

ら噴き出た汗を拭いたり、水を飲ま

せたりしている。

メグの身体を拭く河田悠斗（19）。

メグは頭を河田に擦り付ける。

河田「優しく」もう少しやから、待ちいな」

隣でシロの世話をする松田大樹（22）

が手を止める。

○函館競馬場・馬場（朝）

高本凜（19）が青毛馬（ノラ）の手

綱を曳いて、ゆったりと歩かせてい

る。

ノラは土を鼻先で嗅ぎながら歩く。

広い馬場に凜とノラだけ。

松田「高本はまたノラの散歩か？」

河田「はい、高本さんにはなついとって、

ノラも楽しんでると違えますか」

松田「甘い！ノラは油断も隙もない奴だか

ら、人に慣れない、少しでも気を抜くと

それを見抜いてすぐにかぶりとかぶりつ

く。今まで何人が流血騒ぎで病院に行っ

たか」

河田「そんな凶暴な馬をなんで新入生の、それも女の子に割り当てたんですか？僕なんかこんな大人しい女の子やのに」

松田「メグは大人しくても他は全部オトコだから油断したら追いかけてまわされるぞ。それよりお前、早いところ終わらせて行けよ、授業に遅れるぞ」

河田「はい」

河田は柱に繋いでいたメグの綱をほどき、馬房に連れて入る。

○函館競馬場・全景

○タイトル「駆ける！駆ける！駆ける！」

○函館大学・構内（回想四力月前）

ほころびかけた桜。

凜は薄手のコートを羽織り、新入生オリエンテーションの封筒を持って歩いていく。

目の前に乗馬ブーツを履いた池口麗子（20）が突然現れる。

麗子「馬乗らない？」

凜は通り過ぎようとする。

麗子「ねえ、馬なんて滅多に乗れないよ、北海道の大地を颯爽と走れるよ」

凜「……いいです」

麗子「新入生でしょ？」

麗子は凜の顔を覗きこむ。

顔をそむける凜。

麗子「気持ちいいから」

凜「いいです」

麗子「いいから、いいから」

麗子は凜の手を取り強引に引つ張る。

凜「いいです。本当に、勘弁してください」

凜は麗子の手を振りほどく。

振りほどかれた勢いで麗子は前のめ

りに倒れかかるが、瞬間、機敏に前

回転して起き上がる。

体操選手のように両手を耳の横でV

字に挙げる。

麗子「決まった！私、体操選手だったのよ。

決まったところで行こう！」

麗子が凜の手を引いて馬場に入る。

馬を器用に操っている小郷真琴（21）

に麗子が手を挙げる。

真琴は応じるように手を振る。

麗子（凜に）あの馬に乗って」

真琴は下馬し、凜に近づく。

麗子に促され、馬の前に立つ凜。

真琴「左手でたてがみと一緒に手綱を持つ

て右手で鐙を掴んで。ここに左足をかけ

て、反動をつけて右足を上げ、馬にまた

がる」

凜の左足は鐙にかかるが、右足をあ

げることができない。

真琴は凜の右足を持ち、凜を乗せる。

真琴「この手綱を両手でしっかり持って。

落ち着いたら馬のお腹を蹴ってみて」

○函館競馬場・馬場（回想四力月前）

『新入部員歓迎』『試乗会』の看板。

数人の乗馬体験者が立っている。

凜は恐る恐る馬のお腹を蹴るが、動かない。

真琴は綱を引き、馬を歩かせる。

真琴「思ったより馬の背中って高いでしょ」

凜「……はい」

真琴「馬好き？決めてる？部活動」

凜「いえ……入るつもりは……」

真琴「馬なんてそう乗れるものでもないか

ら、まあ経験と違って」

新入生を乗せた馬が数頭、馬場の中

を歩いている。

真琴「機嫌損ねてる？それとも緊張して

る？」

凜「どちらでもないです」

真琴は凜の顔を見上げる。

○同・厩舎・前（回想四力月前）

糞尿で湿った寝藁が地面一面に干してある。

真琴は凜を乗せたまま、馬場から馬を曳いて来る。

真琴「ここが馬のすみか」

凜はその激臭に鼻を押さえる。

真琴「じき、慣れるから、この刺激臭。馬

の世話して掃除して、大変だけど、こん

などところにいたらヤナこととかどうでも

よくなってくるよ」

凜は馬の上から真琴を見下ろす。

○同・馬場（朝）（回想前に戻る）

凜はノラの手綱をひいて馬房に連れて行く。

真夏の太陽が降り注ぐ。

かせている。

その中央に立つ松田。

○同・厩舎・前（早朝）

輪の外に橘蓮（22）も立つ。

凜はノラの蹄の泥をとったり、身体を拭いたり世話をする。

松田「（一年生たちに号令） 鎧を外せ」

身体を上下に揺らし、じっとしてい

一斉に皆が鎧を外す。

河田の身体がぐらぐら揺れる。

ないノラ。

松田「常足から速足！」

全員が馬のお腹を蹴る。

○函館大学・講義室内

凜は駆けこんで空いている席に座る。

一斉に速足になる馬たち。

途端、河田が落馬する。

手綱を放さない河田。

○函館競馬場・馬場（早朝）

ノラに乗った凜、メグに乗った河田、

メグは立ち止まる。

蒼に乗った芦田大和（18）、スイに乗

松田「もっとスピードをあげろ」

った桑野美優（18）、マッキーに乗っ

それぞれが馬のお腹を力強く蹴り、

た上園健太（18）が輪になり馬を歩

スピードがあがる。

河田も再びメグに乗り、芦田の前にメグを入れ、皆に続く。

松田「河田、前傾姿勢になつてる。上体をまつすぐ起こして、胸を張れ。腰で乗れ。

芦田、かかとを下げろ。膝がクの字になつてる、まつすぐしろ。上園と桑野も段々前傾姿勢になつて来た。馬の動きを座骨と膝で吸収するんだ！高本はもつと関節を柔軟にしろ、馬体に身体が垂直になるように乗るんだ！」

各々直そうとするが、不安定な体勢に皆が苦しそうな顔をしている。

松田「手綱を放せ」

一斉に手綱を放す。

松田「もっと、蹴つて、スピードをあげろ」

凜が落馬する。

素早くノラの手綱をつかむ。

美優が落馬し、手綱を放す。

美優を落としたスイが河田の乗るメグに向かう。

メグは驚き、前足を上げる。

河田も落馬する。

松田はスイの手綱を取り制止させる。

河田から離れたメグは馬場の中を疾走し始める。

マルに乗った真琴、ヒマルに乗った平山ゆかり（21）、シロに乗った麗子が輪になり、瀬田コーチ（45）の号令のもと、馬を動かしている。

馬の頭は垂れ、ハミには泡が吹きだし、歩調正しく歩いている。

メグの疾走により、三人は手綱を引

き馬を止める。

橘が走り廻るメグに静かに寄り「お
うら、おうら」と声をかける。

メグの勢いが弱まり、手綱を取る橘。
様子を見守っている部員たち。

松田「河田以外はもとの場所に戻れ。河田
は橘に指示を上げ」

河田を除く四人が練習の輪を作る。

河田は橘の方に走って行く。

橘はメグの背中に乗り静かに歩かせ
る。

河田が乗った時とは明らかに違う歩
様。

松田「桑野を先頭に速足で馬場一周、その
まま騎乗して常足で厩舎に戻れ」

美優を先頭にして、四人が馬場を一

周し、馬場から出る四頭の馬。

橘がメグを操り、障害を颯爽と跳ん
でいる。

河田はメグの飛越を見守る。

○同・厩舎・前（早朝）

朝の太陽が厩舎を射す。

汗びっしょりになった馬の手入れを
している部員たち。

ノラの汗を拭く凧。

蹄鉄に詰まった泥を拭い、水で洗い
流し、油を塗る。

凧はノラの足に何度も振り払われた
り蹴られたりする。

○函館大学・大講義室（朝）

大勢が聴講している授業が終わる。

中央辺りの座席で凜は机にうつ伏し

て寝ている。

隣の柳麗奈（18）が凜の腕をくんく

んと嗅ぎ、顔をしかめる。

凜、目を覚まして麗奈を見る。

麗奈「どうにかならないの？その獣みたい

な臭い」

凜、自分の腕を嗅いでみる。

麗奈「女じゃない、その臭い」

凜「シャワーの時間が無かった」

麗奈「馬なんて止めたら？せつかくの大学

生活をもっと楽しまないと」

麗奈は凜に顔を近づける。

麗奈「今日、合コンあるんだけど。水産学

部の三年生。高校の先輩が来るのよ。か

っこいい人を連れて来てくれるらしい」

凜「興味ない」

麗奈「馬の方がいいとか言わないでよ。男

がいいよ。馬には言葉は通じない、心も

ない」

凜「男にも心はないよ。言葉も通じない」

麗奈「何かあったんだな、こりゃ。まあ、

たとえそうであつても合コンくらいいい

じゃない。それに大学は人生の中で唯一、

自由な時間を楽しめるときなのよ。色ん

な人と会って、色んな経験してこれから

の人生の準備を整えるの。馬とつきあう

だけでは幅は広がらない。そりゃあ部活

動というものはいいと思うよ。鍛錬修練、

その中で繋がる深い人間関係。就職も部

活動している学生のほうが優位っていうくらいだし。でも、凜の場合、部活動で誰かと深く繋がるといふこともしてなさそうだし。楽しそうでもない。目標を持つていそうでもない。やけっぱちっぽい。そんな部活動に価値はある？ね、そういうことで合コン行こう」

凜「やけっぱちか…」

麗奈「そこ？」

凜「え？」

麗奈「頼む。もう人数に入ってるのよ。一度くらい私と出かけてもいいじゃない。入学して四カ月ずつと一緒にいるのに」

凜「諦めたように」わかった」

麗奈「わーよかった。でも合コンの前にち

ゃんとシャワー浴びて来てよ、獣臭い」

凜「めんどくさいなあ」

次の授業の学生たちが入ってくる。

前方から美優が歩いてくる。

凜に気づき美優は胸の前で手を振る。

麗奈「馬術部の子よね」

小さく「うん」と言いながら凜も美優に手を振る。

麗奈「あの子のこと嫌いでしょう」

凜「意外そうに」どうして？」

麗奈「直観」

凜「別に好きでも嫌いでもない。好き嫌いの感情が起こるほど立ち入らない」

麗奈「私は立ち入らなくても苦手だな、あ

あいう子は。もてるのよね、ああいう子」

凜「そうなんだ」

麗奈「凜はほんと浮世離れしているという

かなんというか…ま、いいわ」

近づいて来る美優。

麗奈「(美優に) あのね、今日、凜は用事が

あつて夕方馬の世話には行けないのよ」

美優「ほんと？」

凜「え、…(迷っている) うん」

美優「松田先輩に伝えておくね。珍しいね。

凜ちゃんが休むなんて」

麗奈「ごめん。私が強引に用事を頼んだのよ」

美優は「うん」と軽く言う。

○松田の下宿部屋

ベッドに並んで座り、松田と真琴が

おにぎりを噛っている。

○函館大学・馬術部・部室

整頓された室内。

ソファで橘がギターを弾いている。

牧野秀太郎(20)が入って来る。

牧野「橘さん、マッキーに上園を乗せるの

止めてもらえませんかね」

橘「なんで(ギターを止める)」

牧野「あんな下手な奴が乗ってたら、マッ

キーが壊れます」

橘「じゃ、他の馬は壊れてもいいのか？」

牧野「マッキーは他の馬とは違います」

橘「高価だから？」

牧野「…：そ当然了。僕の馬です」

橘「だったらマッキーを連れて乗馬クラブ

にでも通えよ。ここは大学の馬術部で部

員はどんな馬でも乗れる」

牧野「他の馬はそれでいいんです。どうせ

二東三文で買った馬ばかりです。でも、

マッキーは血統書つきのサラブレッドで

す。外車一台はゆうに買えます。マッキ

ーのおかげで去年の公式戦には優勝だっ

てできたじゃないですか」

橘「そうだな。たいしたもんだった」

牧野「僕とマッキーは最強なんです」

橘「そうだな。最強だな」

牧野「橘さんたちをさしおいて僕だけすみ

ません」

橘「お前の馬だからな。それにお前の実力だ」

牧野「いやあ、まあそうなんですけど」

橘「でも馬術部の馬として登録されている

んだから下級生に練習させてやってくれ。

頼む。大事に乗らせる」

牧野「橘さんにそう言われたらイヤとは言

えませんが……。橘さんもマッキーに

乗りたいですか？」

橘「いや、いいよ」

牧野「このままじゃ橘さんいつまで経って

も予選どまりですよ。もう卒部なのに。

一回くらい勝ちたいでしょう」

橘「そりゃ勝ちたいよ。でもな、他の馬に

乗って勝ちたいとは思わないよ」

牧野「橘さんらしいなあ。そんなことじゃ

社会に出ても勝てませんよ。固執ってこ

とは人間を小さくしますよ。まあいいで

すけど」

橘「そうだな」

牧野「やっぱりマッキーに下級生は乗せた

くないなあ」

橘「そういうことは、部長に言え、松田に」

牧野「橘さんから言って下さいよ」

橘「僕は言わないよ、そんなこと」

牧野「だって、肝心なことは橘さんが決め

てるじゃないですか」

橘はギターを再び弾き始める。

牧野「橘さんはふた昔前の神田川の世界な

んですよねー。昭和臭がぷんぷんする」

橘「お前、昭和を知らねえだろ」

牧野「橘さんだって知らないでしょ」

○松田の下宿部屋

ベッドに裸で寝ている松田と真琴。

松田「元気だな」

真琴「毎日、ごぼう食べてるもん。ごぼう

は滋養強壮にいいのよ」

松田「あ、そう。どうりで」

真琴「ねえ、新入部員どう？」

松田「いい線いってるんじゃないか？」

真琴「どっちが？」

松田「どっちって？みんな、よく乗ってる」

真琴「そうじゃなくて高本さんと桑野さん
をどう思うかよ」

松田「高本はでかい分、脚力があるのかな、

馬を理解しつつある。桑野は華奢な分、

損してる。手綱の使い方は桑野の方が上

手い」

真琴「そうじゃなくて女の子としてどう思

うかって訊いてるのよ」

松田「真琴でもそういうこと気になるんだ」

真琴「何よ、それ」

松田「自分が一番、って思ってるのかと」

真琴「私とは関係ないよ。一緒にしないで」

松田「そうだな、土俵が違う」

真琴「あの子たちつて、正反対でしょ」

松田「そうか？」

真琴「そうよ。桑野さんは女の子っぽくて

可愛いけど、高本さんはふてた男の子

みたい」

松田「うーん、まあ、そうかな」

真琴「まあ、いいや」

真琴はすつくと立ち上がり、素早く

服を着て、部屋を出て行く。

松田「あゝごぼう喰いてえ（背中に叫ぶ）」

○函館競馬場・厩舎・前（夕）

地面一面に干された寝藁。

部員達は鍬を持ち、寝藁から糞を落

としていく作業をしている。

糞を落とす、乾いた藁は積み重ねられ、それらは馬房に運ばれる。

馬房から出され、別個に繋がれている馬たち。

数人が餌の準備をする。

ノラの世話をしている橘。

橘の元に近寄る美優。

美優「先輩、すみませ〜ん。やっぱり、ス

イの世話は一人じゃ怖いです」

橘「ノラが終わったら、行くから」

美優「すみませ〜ん」

ぺこっと頭を下げ、スイの所へ戻る。

ノラが橘の腕にガブリと噛みつく。

橘「（ノラの首を殴り、大声で）おりゃあ」

橘の隣でマッキーの手入れをしてい

る牧野。

牧野「高本はいっつも蹴られたり、噛まれたりしてますけど、橘さんみたいな情けない声、あげないですよ」

牧野はマツキーを愛おしげに撫でる。

牧野「虐めですよー。ノラを高本ひとりに世話をさせて、大人しいスイを桑野と二人で世話してるんだから。依怙贖も甚だしい」

橘がスイの方を見ると、心細そうな表情の美優と目が合う。

○居酒屋『太平記』・店内（夜）

五対五の合コン。

盛り上がっている。

赤いワンピースを着ている凜。

遠くに座る麗奈。

凜の横に宇木琉（21）が座っている。

宇木「馬術部なんだって？」

凜「はい」

宇木「臭いだろ、馬術部」

凜「もう慣れました」

宇木「確かに臭いには慣れるけど、それにしてもひどい。乗っている姿はかっこいいけど」

凜は麗奈が宇木と自分を窺っているのに気づく。

凜「糞尿の片づけをして、餌を作って、ふけだらけの身体を手入れして、途轍もなく汚れた小屋を掃除して、それが主な活動です」

宇木はニタニタして聞いている。

宇木「なんで続けてるの？麗奈は高本さんが意地になって部を続けてるって言うんだよ」

凜は隣の男と話している麗奈を見る。

宇木「麗奈は高本さんにいい人を紹介して

ほしいとも言ってた」

ビールジョッキを持った男が近づいて

来ると凜の横に座る。

男「合コン初めてなんだって。また声か

けるよ、別のゼミのやつにも」

凜の腕をべたべた触る男一。

宇木「お前また気安くそういうことするな」

凜は虚しい表情で一同を見る。

○居酒屋『太平記』・表（夜）

合コンメンバーが群れている。

口々に「カラオケ、カラオケ」と叫ぶ。

凜「（麗奈に小声で）ごめん、私、やっぱり

馬が気になる」

麗奈「合コンを楽しんでないのは見え見え。

切ない顔をして。いいよ、行って」

凜「麗奈の先輩にも気を遣わせてしまつて、

謝つといて」

麗奈「いいよ。宇木さんはいい人だから」

凜はそつとその場から立ち去る。

○函館競馬場・厩舎・前（夜）

凜が急ぎ足で厩舎に近づく。

入口が開き、電気がついている。

馬たちの静かな鼻息と餌桶が柱に当

○函館競馬場・馬房（夜）

静まりかえっている。

たる音がしている。

突然、馬の悲鳴にも似たけたたましい鳴き声がする。

馬房を暴れ回る音が聞こえてくる。

蹄が壁を蹴る激しい音。

慌てて凜は中に入る。

○同・厩舎・中（夜）

けたたましい音はノラの馬房から。

ノラをシャベルで殴っている牧野の姿。

凜「何やってるんですか！（怒鳴る）」

牧野は驚いたように凜を見る。

ノラは馬房の中で暴れ廻っている。

再度、シャベルを振りかざし、ノラを殴ろうとする牧野。

凜は馬房に入り、牧野を羽交い絞め

にして、馬房から引きずり出す。

地面に倒れる牧野。

牧野の右腕から血が流れている。

凜「ノラに何やったんですか？」

牧野「（ヒステリックに）お前は、僕の心配

より、馬の心配か！！」

凜「ひどいじゃないですか！」

牧野「ひどいのはこの馬鹿馬だ。急に噛み

やがった。仕置きしただけのことだ。こ

んな馬、殺してやる」

凜「止めて下さい！」

立ち上がろうとする牧野を押さえつ

ける凜。

凜「牧野さん！馬房は唯一、自分だけの空間なんだって！そこを守ってやらなくて

はならないって言ったのは牧野さんじゃないですか」

牧野「誰にももの言ってるんだ。僕は子供の頃から馬に乗ってるんだ。馬のことはお前の千倍は知ってる」

凜「知ってても今やってることは虐待じゃないですか！」

牧野「こんな馬は早いとこ殺せばいいんだ」
凜「酷いこと言わないでください！」

牧野「お前も止めてしまえ。馬術なんてもんはお前らみたいな貧乏人がやるスポーツじゃないんだ」

凜「馬を虐待する人がするスポーツでもありません」

河田の声「どないしたんですか？」

暗がりから河田が現れる。

牧野「お前、遅いよ。おかげでこんなにひどい目に遭ったじゃないか」

牧野は河田に血だらけの腕を見せる。

河田「(驚き) どないしたんですか？」

牧野「この馬鹿馬に噛まれた」

河田は鞆からタオルを出し、牧野の血を拭こうとするが牧野はかわす。

牧野「そんな汚いもので拭くなよ。消毒して軟膏塗ってくれよ」

牧野は厩舎から出て行く。

河田「(凜に) 大丈夫か？」

うなづく凜。

河田「ちょっと待っというてや。牧野さんの手当てしてくるから。な、待っというてや。

でもノラに近づくなや。興奮しとるからな。そつとしいたり」

河田は牧野の後を追い厩舎から出る。

ノラは背中を向けている。

凜「(ノラの背中に) ごめん。今日、来られ

なくて。あんな目に遭わせて」

ノラの臀部から血が流れている。

凜「ノラ、怪我してる」

凜は道具箱から軟膏を取出し、右手

にたっぷりと取る。

馬房に入り、ノラに近づく。

凜「葉塗るから。じつとしといて」

臀部に十センチほどの深い傷がある。

軟膏をそつと塗りこむ。

しつぽを静かに動かし、ノラは頭を

凜の方に向け、凜の腕をゆっくり噛

む。

凜の腕から血が流れる。

凜「私で発散させていいから。あなたの怒り」

河田の声「高本さん、はよ出てきいな」

○自動販売機コーナー(夜)

ベンチに並んで座り、缶コーヒーを

飲む凜と河田。

凜「牧野さんの怪我はたいしたことなかつ

た。あの人が甘えん坊の弱虫というこ

とがよう解ったわ」

河田は凜の腕から血が流れているの

に気づく。

河田「(驚き) ノラか？」

凜「大丈夫」

河田「大丈夫やあらへんがな」

タオルを出す、凜の腕に当てるの

を躊躇する。

河田「汚いか？このタオル」

凜「汚くないけど、タオルが汚れる」

河田「あんたの辛抱強さを見とつたら泣き

とうなる（タオルを当てる）」

凜「牧野さん、ひどい」

河田「そやな」

凜「ひどい」

河田「そやな」

腕の血を拭う凜。

河田「今日は、どないしたんや？雰囲気、

えらく違うけど」

凜「え？（ワンピースに気づき）あ、合コン」

河田「おもしろかった？」

凜「全然」

河田「なんで？合コンおもしろうやがな」

凜「合コンなんて柄じゃなかった。ほんの

ちよつと後ろめたさ感じながら合コンに

参加したし。作業をさぼってまで行くん

じゃなかった。ノラをあんな目に遭わせ

て」

河田「高本さん真面目やからな」

凜「真面目じゃない。意地で続けてるだけ」

河田「意地でも俺には真似できへんな。あ

のノラの面倒みとる高本さんは凄いで。」

ノラを高本さんの担当にした人は鬼やで」

凜「私もそう思う」

河田「そやろ。どう考えても一年生には無

理やで。一年生だけやなく、誰にも扱えん」

凜「いやがらせだと思った。噛まれれば噛

まれるほど。それならそれでいいと思っ

てね。途中で投げ出すのがいやなだけで

続けてるんだと思う」

河田「それにしては牧野さんへの怒りは本
気やったで」

凜「ああいうのはホントにいや。強いもの
が弱いものを傷つける…」

河田「なあ、コーヒーもう一杯飲むか？」

凜「ありがとう。ご馳走さま。明日も早い
から帰ろう」

河田は凜の横顔を見つめる。

河田「なあ、またこんな風にコーヒー飲もう」

凜「え？」

河田「(同じことは言えない) なんか困った

ことがあったらいつでも話し聞くで」

凜「ありがとう」

月光に映える凜の顔。

○BMW・車内(夜)

牧野が助手席に座っている。

河田が戻って来る。

牧野「どこ行ってたんだよ。遅いよ」

河田「便所行ってました」

牧野「長いウンコだな。もういっぺん、傷、
見てよ」

河田「皮の薄いのがちょっと剥けるとるだ
けです。牧野さん専用の高価な軟膏も塗
りましたから大丈夫ですって」

牧野「歯型ついてなかったか？」

河田「歯型がいっぱいついてんのは高本さ
んの腕です。牧野さんにはついてません」

牧野「あの馬、殺処分にしてやる」

河田「でも牧野さんがノラにやってことも
褒められることじゃないと思いますけど」

牧野「お前まで高本みたいなこと言うな」

河田「そやかてシャベルで殴るんはいきすぎと違えますか？高本さんもそんな見たら激昂しますって。許したって下さい」

牧野「許さん、あんな奴、素人の分際で」

河田「まあそう言わんで。そもそもノラを高本さんに割り当てたのが酷なんです」

牧野「そりゃあ橘さんが高本のこと嫌いだからだろ。ノラなんて今まで誰も担当になつてなかったのに」

河田「橘さんがですか？」

牧野「橘さんはかわいげのない高本をいじめて追い出したんだ」

河田「橘さんがそんなえげつないやり方するとは思えませんけど」

牧野「もういい。マッキーの様子見に来た

けど傷が痛いから帰る。運転してくれよ」

河田「まるで子供やないですか」
寝たふりをする牧野。

○函館競馬場・厩舎・中（早朝）

夜明けの太陽光が差し込む。

ノラの馬房の前に立つ凜。

凜「（ノラに）おはよう。大丈夫？」

振り向かないノラ。

背後から足音がする。

河田「やっぱり高本さんか」

凜「おはよう。早いね。昨日はごちそうさま」
河田「なんや高本さんがノラのこと早くに見に来るような気がしとった」

凜「ちよつと気になって。牧野さんのことも」

河田「あの人は昨日のことはケロっと忘れ

と思うので。基本、育ちがええから」

松田「準備運動が終わったら、集合」

一年生が騎乗した馬が集まる。

○同・厩舎・前（早朝）

牧野がマッキーにブラシをかけている。

松田「今日の練習は上級生から。池口はノラに乗ってくれるか？」
麗子「（歯切れよく）はい」

凜が牧野に近づく。後ずさる牧野。

凜「昨日はすみませんでした」

松田がシロに、橘がスイに乗り、歩調を合わせ、動き出す。

牧野「（虚をつかれ）？」

コーチが二人に号令をかけると、常

凜「興奮して無礼なことをしました」

足から駆け足に変え、横歩き、斜め

牧野「（言葉につまりながら）いや、あれは

歩きなど、歩調を合わせた二頭の動

僕も悪かった。あ、あれだ、その……」

き。

○同・馬場（早朝）

一年生たちが担当馬をゆつくりと歩かせている。

一年生たちが二人を見学している。
馬場の離れた場所では、真琴がマル、ゆかりがヒマルで障害を跳んでいる。

松田は真琴と一緒に馬場に現れる。

真琴「（蒼に乗って準備運動をする芦田に）
芦田くん、障害、跳んでみなさい」

一年生たちは一斉に障害の方を向く。

凜「（ノラの姿を見て）綺麗な動き」

芦田は早足で障害の方へ進む。

河田は凜の横顔を窺う。

真琴「鎧をしつかり踏んで、前傾しなさい。

障害の前に来たら、手綱をひき、跳ぶと

○函館大学・第一学食（朝）

きは手綱を緩める」

一人で朝食を食べる橘。

芦田は体制を崩しながらも低い障害

背後からゆかりが近づく。

を跳ぶ。

ゆかり「ここいい？（向かいの席に）」

上園「僕も早く、障害跳びたいなあ」

橘「いいよ。松田と小郷が来るけど」

河田「そやな。でも、僕には当分無理やな」

ゆかり「じゃ、いいや。お邪魔でしょ」

上園「意外と簡単そうだよ、ね、桑野さん」

橘「夏合宿の話があるらしい」

美優「（かわいく）でも、ちょっと怖い」

松田と真琴が近づいて来る。

牧野はマッキー、麗子がノラに乗り、

松田「おつ、お前らより戻したのか？」

コーチの号令で歩調を合わせて進ん

橘「（むきになり）そんなんじゃないよ。も

でいる。

ともと」

馬は首を垂れ、姿よく動いている。

ゆかり「ちょっと通りかかっただけ。私、

コーチ「いいぞ、いい形になってきた」

授業があるから行くね」

ゆかりは逃げるように去る。

真琴「ゆかり、まだ施設に行ってるみたい」

松田「ボランティアかあ、ゆかりは優しい

女の子だなあ、老人の世話なんてな」

真琴「話を遮り」橘君、今日の馬場、綺麗

だったよ」

松田「おい、まずは僕のことを褒めろよ」

真琴「松田君なんて見てないもん」

橘「笑いながら」お前から似てるよな」

真琴「止めて、私、こんな子供じゃない」

松田「子供とはなんだ」

橘「そりゃそうと相談ってなんだ」

松田「そうだ。その話だ。夏合宿の留守番

のことだ」

橘「牧野と池口だろ」

松田「それがな、こいつが池口は連れて行

ってやりたいて言うんだ」

真琴「だってね。あんなに真面目に世話を

して練習にも来てるのに去年も留守番な

のよ。橘君には悪いけど、ゆかりに留守

番してもらいたいのよ」

松田「それもかわいそうなんだけどな。も

う卒業だし、池口はまだ一年あるしな」

真琴「ゆかりは殆ど馬の世話にも来なく

せに、夏合宿には毎年行ってるんだよね」

橘「いいじゃないか。ゆかりが留守番で」

真琴と松田は顔を見合わせる。

松田「いいの？」

橘「なんでそんなこと僕に聞くんだ」

松田「いやあ、そりゃ、まあ。最後の年だ

しな一緒の方がいいかなと」

橘「関係ないよ。そういえば、今朝、河田

が来て『高本をノラの担当から外してくれ』と言った、高本をこの部から追い出したのか、かわいそうだと、言われた」

真琴「河田君が？へえ、そうなんだ」

橘「変えた方がいいか？」

松田「決めたのはお前だぞ、反対したのに」

橘「そうだな」

真琴「ノラは誰でも無理よ」

橘「でもな、昨日の夜、ノラに暴力をふる

った牧野を羽交い絞めにしたらしい」

真琴「驚いて）高本さんでもそんな熱いと

ころがあるんだ」

松田「高本はノラとお似合いだ」

橘「（激昂し）どういう意味だ！」

松田「冗談だよ。本気になるな」

真琴「そうよ。高本さんが嫌いな訳じゃな

いんだから。ただ不思議なのよ、あんなに溶け込まないことが」

橘は「先行く」と席を立つ。

○同・第二学生食堂

凜と麗奈が食事を終えた後。

麗奈は盛んにメールを打っている。

麗奈「（画像を見たまま）何かあった？」

凜「何が？」

麗奈「ぼうっとしてる」

凜「邪魔しちゃいけないかと思って」

麗奈「嘘だあ。凜の様子がおかしいからこ

っちが気を遣っているのに」

凜「馬が何考えているか解らない」

麗奈「（きよとんととして）は？何それ？う、

馬でしょ？馬の気持ち？解らないで結

構！」

凜「大事なことなのよ」

麗奈「凜、驚きだわ。想像の域を超えてる」

凜「それでもねえ、私にとっては……」

麗奈「昨日、あの後で馬のところ行っただの？」

凜「行った」

麗奈「あれからの方が楽しかったのに。気に入った人はいなかった？」

凜「宇木さん、麗奈に似合う。色合いが同じ」

麗奈「いや、そんなんじゃない。ただの先輩」

凜「いいと思うよ、ほんとにそう思う」

麗奈「凜って人のことなんか全く興味ない

ような顔して敏感だよね」

凜「麗奈がきらきらしてる、宇木さんのこ

と話す時、宇木さんも麗奈を大切にしてい

るよ」

麗奈「人の気持ちは理解できるのに、どう

して馬ばかり相手にするの？馬の気持

ちなんて理解しなくてもいいのに。どう

して人を遠ざけるの？私のことさえ本気

で信用してないよね」

凜「そんなことないよ。ありがたい」

麗奈「ありがたいって言葉はないよ。友達に」

凜「……ごめん」

麗奈「愛情の一方通行を感じる」

凜「え……」

凜は麗奈の顔をまじまじと見つめる。

麗奈「何よ」

凜「ほんとにありがとう」

麗奈「バカ」

○同・研究室・実験室

白衣を着て細胞を染色している橘。

後ろの入口から牧野が入って来る。

牧野「橘さん」

橘「（振り向かず）なんだ？」

牧野「ノラ、なんとかしませんか？」

橘「お前はマッキーのことだけ考えとけ」

牧野「（腕の傷を見せながら）昨日ノラにこ

つびどく噛まれて。まだ痛いんですよ。

おまけに高本が現れて僕のことを殴った

んですよ。まあ、今朝、僕のところに来

て謝りましたけどね。たぶん、高本は僕

に気があるんです」

橘「ノラのことはお前には関係ないから、

余計な口出しはするな」

牧野「橘さんなら、解つてくれると思った

んだけどな。高本のためにも」

○函館競馬場・馬場（早朝）

一年生各自が馬に乗り、障害の前に

並ぶ。凜、芦田、河田、美優、上園

の順。

上園はヒマルに乗っている。

松田「鞭は馬に見えないくらい位置で立

てる。鐙の位置を短くしろ。早足で前傾

姿勢をとれ、手綱を持って、馬の動きに

合わせて、持ち上げるように障害を跳ぶ。

兎に角飛んでみる！高本から先頭で進め」

凜は声を出し、ノラに速足をさせる。

障害物の前で手綱を引き、凜とノラ

は一体になって跳び越える。二つ、

三つと全ての障害物を跳び越える。

続く芦田も無事に跳ぶ。

河田は二つ目の障害物の前でメグに振り落とされるが、すぐに乗り直し、

三つ目を跳び越える。

美優の乗ったスイが三つ目の障害物を跳び越えた時、後ろ足をはね上げる。

松田「桑野、跳ぶたびに拍車がスイのお腹を刺してる。スイが驚いてるんだ。膝の内側で鞍を抱くように力を入れる。鐙を外しても、その力だけで立ってられるくらいのだ。踵は落として、外側に向ける」

美優は必死で手綱にすがりつく。

心配そうに美優を振り返る芦田。

上園は無事に全て障害を跳び越える。

松田「もう一回、高本から、始め！」

凜は返事をし、スピードをあげた速

足で障害物を三つとも綺麗な姿勢で跳ぶ。

松田「よくし、高本その調子だ！次、芦田」

次々と跳ぶ。

橘が凜に近づいて来る。

橘「高本、コツは掴めてるが、もっと前傾姿勢をとると馬も跳びやすい、手綱ももう少し短めに持て」

凜「はい」

マルに乗った真琴が一年生に近づく。

真琴「桑野さん、ぶりっこはいいから、ち

やんと乗りなさい！真剣味がない！」

美優の目からぼろぼろ涙が溢れる。

真琴「(うんざりした表情で) 注意受けたく

らいで泣かないで！信じられない」

松田は真琴の剣幕に驚いている。

美優は馬上で声を出して泣く。

橘「(凜に小さい声で)こわっ。(場を治めるために)ノラに乗るから代わって」

凜はノラから降り、橘が乗る。

橘「(松田に)お前も一緒に練習しようや」

松田「あ、ああ」

松田、泣いている美優の傍に寄り、美優の足を優しく叩く。

松田「(美優に)大丈夫か？」

美優はいやいやをする。

松田「代われ」

松田は美優を下ろして、スイに乗る。

橘は騎乗したまま真琴に近寄る。

橘「ああいう言い方は感心せんよ」

真琴「遊びで乗ってる訳じゃないんだから」

橘「それでも言い方というものが……」

真琴「昨日、松田君の部屋に手作りのクッキーを差し入れしに来たそうよ、桑野さん」

橘「あ、いいなあ、僕も食べたい」

真琴「ふざけないで」

橘「そうカリカリするな。気に入らないかもしれないけど、そういうこと練習中に出すなよ。お前の価値まで下げる」

真琴「だって。腹が立ったんだもん」

橘「それにしても、クッキーをもらったことを喜んでお前に報告する松田も松田だよ」

真琴「でしょ。ほんとに子供なんだから」

スイに乗った松田が近づいて来る。

松田「おい、どうしたんだよ。あんなに」

泣かせて」

真琴「大丈夫よ、あの子が泣けば芦田君だって、上園君だって、慰めてくれるから」

凜が美優の隣に並んで立つ。

松田「馬に乗っている一年生は、牧野のマ

ツキーについて駆け足の練習をしろ。桑

野と高本は見学、（遠くの牧野に大声で）

牧野一年生に駆け足を教えてやれ」

牧野「（遠くから）え〜〜やですよ〜」

一年生たちは牧野の方に進む。

凜と美優はマツキーの方へ歩く。

凜「（美優に）気にすることないよ」

美優「ひどくない？」

凜「ちよっときつかったね」

美優「小郷さん、松田先輩とつきあってる

んだって。でも一方的だよ、絶対」

凜「え？あの二人って」

美優「気づかない？（低い声）」

凜「っていうか、いつもと雰囲気違う」

美優「そう？」

牧野はマツキーを駆け足にさせる。

一年生の三頭は駆け足にならない。

牧野「（ヒステリックに）なんでできないん

だよ、お前ら！！僕を見ておけよ」

凜「牧野さんって、身体で憶えてるから、

口では上手に説明できないんだ」

美優「ねえ、私、芦田君と上園君に同じ映

画に誘われてるんだけど」

凜「そうなんだ」

美優「断るの悪いから両方と二回行くつも

り」

凜「せめて別の映画にしたら？」

美優「ねえ、松田先輩、かっこよくない？」

凜「そうかな（ノラを見ている）」

美優「じゃ、凜ちゃん是谁が好み？」

凜「そういうの興味ないな」

美優「もったいない」

目の前で馬に乗る一年生三人は誰も

駆け足ができず、必死の形相。

○同・厩舎・前（朝）

各々が馬の汗を拭いている。

松田「（全員に聞こえるように）今日、夜の

作業が終わった後、飲み会。夏合宿の打

ち合わせもする。今回の買い物係は桑野

と芹田だな。小郷はきんぴらごぼうを作

ってくれるそうだ！元気になるぞ！ごぼ

うは」

松田「高本、たまには参加しろよ」

凜「（小さく）はあ……」

松田「お前、いつつもじゃないか。せめて

何か作って差し入れだけでもしろ、な」

凜「……はあ」

凜はノラの爪の油を塗る。

○スーパー・店内（夕）

美優と芹田が飲み会の買い物。

○別のスーパー（夕）

ひとりで買い物をする凜。

○函館競馬場・厩舎・前（夜）

地面に大判のビニールシートを敷き、

部員たちが騒いでいる。

ビール、ウーロン茶、スナック菓子、惣菜などが並んでいる。

パックに入ったエビフライ、とんかつが男子部員たちの口に放り込まれる。

松田「これ作ったの、高本ってことか？」

真琴「高本さんにあんなこと言うからじゃない、かわいそうに」

松田「じゃ、ほんとに作るだけ作って、自分は帰ったってことか？」

真琴「そうよ」

松田「なんで、そこまでして参加しないんだ、高本は」

橘はとんかつを美味しそうに頬張る。

橘「旨いな(呟く)」

美優は芦田と上園に挟まれ、嬉しそ

うにお茶を飲んでる。

美優「部活動ってみんなの輪が大切なのに、凜ちゃんのせいで同期の足並み揃わないよね」

芦田「河田と高本さんは浪人組だから」

美優「一つ上でも、こっちは何とも思っていないのに、気にしているのかなあ」

上園「河田も何とも思っていないよ」

エビフライを食べていた河田「？」
と上園のほうを振り返る。

○同・馬場（早朝）

五人の一年生が障害物を跳んでいる。

凜以外は皆、跳び越えられるが凜のノラだけは障害の前で止まる。

その度に凜は落馬しそうになる。

松田「高本、調子がいい時と悪い時がある
ということは、まだ本当の実力がついて
ないということだ。基本姿勢を身体で憶
えろ」

凜「はい」

松田「高本だけ、あと二巡しろ。あとの者
は馬場の回りを歩かせて、クールダウン」

凜はノラを駆け足にさせ、障害を跳
ぼうとするが障害前でノラは急に止
まる。

凜はノラの前に宙返りをして落馬す
る。

手綱を手放してしまふ凜。

ノラは凜の手を離れ、疾走し始める。

松田「舌打ちし」他の馬は手綱をしつかり
持つておけ。ノラが襲いかかるぞ」

ノラはスイの側に走り寄ろうとする。
スイに乗った美優の怯えた顔。

松田が血相を変えて走り出す。

それぞれの馬に乗っている部員たち
は固唾を飲んで見守っている。

凜「(大声で)ノラ、ノラ、止まって！」

一瞬、ノラの耳がピンと後ろに向く。

ノラは走るのを止める。

ノラは何もなかったかのように土の
においを嗅ぎ始める。

凜はノラの方に走り、手綱を取る。

部員たちはその様子に鎮まり返る。

松田「高本、乗馬して馬場一周、練習終了」

凜はノラに乗り、最後尾の河田につ
いてゆっくりと馬場を歩く。

河田は振り向いて優しく微笑む。

河田「ノラは高本さんの言葉が解るんやな」

馬場中に響く」

微笑み返す凜。

障害を跳ぶ凜。

○同・厩舎・前（夕）

馬の手入れをしている部員たち。

落馬せず跳び切ることができるが、
身体が激しく揺れる。

○同・馬場（早朝）

障害を跳んでいる一年生たち。

凜は何度跳んでも落馬する。

部員たちはその気魄に驚く。

メグに乗った河田は凜を目で追う。

落馬しても手綱は放さない。

○函館大学・第二学食

松田「一年生、今日の練習、終わり！！上

凜と麗奈がカレーを食べている。

級生と交代。高本はそのまま橘につけ」

麗奈「淋しい？」

橘「（凜に）手綱をより短く持つてみる」

凜「淋しい」

言われた通りにする凜。

麗奈「うわっ気持ち悪、凜が素直なのが怖い。

橘「姿勢はもっと前傾。内股の力が弱い！

ほんとに帰らないの？」

跳ぶことに集中しろ！（迫力のある声が

凜「合宿もあるから」

麗奈「わざわざ暑いときに東京に帰ること

もないか」

凜「函館に来てまだ四カ月なのにここが終

の棲家みたいな気になる」

麗奈「嬉しいこと言ってくれるじゃない」

凜「ありがと、ほんとに」

麗奈「ちよつと止めてよ」

凜「気をつけてよ」

麗奈「あー行きたくないな。一か月もアメ

リカつて。高三のときはアメリカが全て

みたいな気で早々に予約しちゃったんだ

よねえ。でも凜に会って変わっちゃった」

凜「私も麗奈に会って変わってきた」

麗奈「え、何が何が？ほんとに？」

凜「(笑いなから)楽しんで帰って来て」

○函館競馬場・馬場(早朝)

中央に立っている松田。

松田「明日から合宿だ。感触をしつかり掴

んどけよ。それじゃ河田先頭で駆け足！」

一年生たちが馬を駆け足にする。

松田「障害に入れ！」

河田から障害を跳ぶ。

最後尾の凜も跳ぶ。

松田「よっし、もう一回、大きな輪を描い

て助走をつけて跳べ」

河田から凜まで全員が障害を跳ぶ。

松田の側に並んでいる橘。

橘「桑野、スイの動きに自分を合わせろ」

美優「(か弱く)はい」

松田「もう一回！」

河田、美優、芦田、上園が跳ぶ。

勢いよく走るノラは障害の手前で横にそれる。

遠心力に勝てず、凜は障害物の丸太の上に背中から強く落ち、丸太に背中が弓なりになっている。

凜は「ぐえええ」とうめき声をあげる。手綱を放されたノラは凜から放れて駆け出す。

凜のうめき声に耳をピンとたてるノラ。

輪を描き、一目散に凜の元に戻る。

ノラは凜の頭を口でもぞもぞと触る。

それはさながら「大丈夫か？」と言っているような姿。

ノラは鼻ズラで凜を押し、丸太の上から凜の身体を地面に降ろす。

皆、驚愕の表情。

地面に下ろされた凜は腰を押さえ、ゆっくりと立ち上がる。

凜「(松田に) すみませんでした。最初からお願いします」

松田「大丈夫か？」

凜「はい」

松田「(橘に) ノラがノラじゃない」

橘「あ、ああ」

ノラに騎乗した凜は輪を描き、最初から障害を跳ぶ。

跳び終えたノラの首筋を「おくら、

おくら」と撫でる。

○電車内

凜と美優が並んで座っている。

美優「だって、子供っぽいよ、あの二人」

凜「松田さんが大人？」

美優「かっこいいよ」

凜「でも小郷さんとききあってるんでしょ」

美優「関係ないよ」

芦田がのそつと近寄る。

凜「あ、私は席変わるわ」

凜は二人から遠ざかる。

凜の席に芦田が座る。

美優「合宿から帰ったらでいい？つきあうの」

芦田「ほんと？つきあってくれるの？」

美優「うん。いいよ」

離れた座席に松田と真琴が並らび、向かいに橘と麗子が座っている。

別の席には上園と河田。

河田「諦めたんか？ええんか？」

上園「かわいいけど……」

河田「かわいいだけで十分やと思うで」

上園「そんなこと思っただけでなくせに」

河田「俺は作ったかわいさが苦手なだけや、

人間の本質的かわいさは必要やで」

上園「……ま、芦田は本気だと思っから」

河田「お前も本気やったやろ」

上園「好きだった。今でもぐらついている」

河田「美優ちゃんはかわいいで、そら」

上園「昨日、高本さんが落馬した時、ノラが高本さんの頭を撫でたあの瞬間じ〜んとした」

河田「そうやな、あれはちよつとしたドラマやったな。馬にかて、人間の本質は伝わるんと違うか」

上園「噛まれても噛まれても、ノラから逃げなかった高本さんの勝利だよ。小郷さんが言ってたけど、高本さんの身体にはノラに噛まれた傷がいつぱいあるんだって。嫁にいけなくなるんじゃないかってほど」

河田「……」

上園「なんなんだろうな」

河田「なんなんやるな」

広大な草原が広がっている。

○函館ファーム・馬場

広大な土地の馬場。

障害物もケタ違いに多い。

部員全員が馬に乗っている。

マンツーマンの指導を受けている。

○同・厩舎

馬の手入れをする部員たち。

○定食屋・店内（夜）

部員たちが疲労困憊の様子で食事をしている。口数が少ない。

○民宿・庭（夜）

照明灯に映される美優と松田の姿。

美優「松田先輩（甘えた声）」

松田「お前のことはかわいいと思うよ。で

も小郷なんだよ。お前には芹田も上園も

いるじゃないか」

美優「いやです」

松田「いやと言われても。頼むからこうい

うだまし討ちみたいなのは止めてくれ。

明日は最終日だぞ。野外乗馬もある。部屋に戻って早く寝ろ」。

美優「松田せんぱうい」

松田「おい。よせ、明日早いんだ」

逃げる松田。

○同・女性部屋（早朝）

女子部員が並んで寝ている。

○同・男性部屋（早朝）

男子部員が寝ている。

○同・食堂（朝）

大テーブルの上に並んだ朝食。

全員が食事をとっている。

松田「五日間、がんばったな。お疲れさま。

今日は野外に出る。馬は野に帰ると普段

見せない走りをするところがある。一年生

はくれぐれも気をつけて手綱を持つこと。

馬のせいではない、お前らの責任だ」

美優「（小声で芦田に）芦田くん、私の後ろ

を走ってくれる？」

芦田「いいよ（嬉しい）」

河田は斜め向かいの凜の顔を見る。

無表情にトマトを噛っている凜。

○草原

九人が九頭の馬に乗り並ぶ。

橘の馬が駆け始めると、それを追い、

次々と後続の馬が走り始める。

一定の間隔を空け、九頭の馬が走る。

○山

馬がどんどんと抜く。

舗装していない山道を走る九頭の馬。

競走馬が先頭に立とうとしている態。

伸びている草木をよけながら九頭が

真琴「高本さん、手綱しつかり引いて！！」

颯爽と走る。

松田「手綱をあげるな、馬が興奮してる！」

時折、美優の「きゃあ」という声。

凜の馬は橘の馬に並ぶ。

○次の山

疾走する馬たち。

凜の馬は橘の馬を追い越し、どんどん

窪んだ道も跳び越える。

ん離れて行く。

美優「きゃああ（大声で）」

河田が必死の形相で、橘の馬に並ぶ。

凜の馬がその声に驚き、突然スピー

橘と河田の馬が凜の馬を追う。

ドをあげる。

橘は馬のお腹を蹴り、速度をあげる。

凜は手綱を引き、スピードを緩めよ

河田もまたそれに続く。

うとするが、余計にスピードがあが

橘「河田、スピードを落とせ、危ない」

る。

河田の顔は真っ青。

真琴、河田、上園、麗子の馬を凜の

橘「危ないから、スピードを落とせ！！」

他の六頭ははるか後ろを走っている。

橘「河田、邪魔だ！（大声）」

河田「俺が助けます（叫ぶ）」

橘「お前には無理だ（大声）」

橘の馬にびったりついている河田。

橘「競争じゃないんだ！！ひっこんでろ！！

邪魔だ、危ない」

それでも河田はスピードを緩めない。

橘「何なんだ。ひっこめ」

橘の馬が河田の馬を制し、距離を離

していく。

空に向かうように先頭で走る凜は意

識が遠のくような感覚に襲われる。

このまま手を離せば楽になるのでは

ないかという恍惚の表情、手綱が手

から離れていく。

徐々に凜と橘の距離が縮まる。

橘は凜の横に並ぶと、自分の馬を凜

の前に被せるように走り、少しずつ

速度を落とす。

ある程度速度が弱まったところで、

凜の持っている手綱を掴み、引っ張

る。

二人の馬は停止する。

橘「大丈夫か？」

凜「……（うなづく）」

河田が追いつく。

その後の六頭も追いつく。

○函館競馬場・厩舎・前（夕）

つなぎの作業服を着た若い男三人が

馬の世話をしている。

牧野はマツキーを丁寧にとオルで拭いている。

凜が自転車に乗って現れる。

牧野「(凜に気づき) おっ！帰ったのか」

凜「お疲れさまでした」

牧野「すぐに逢いに来たのか？(僕に)」

凜「ええ、あ、はい(聞いてはいない)」

凜は厩舎の中に飛び込む。

○同・厩舎・中(夕)

ノラは馬房の中。

凜「ノラっ」

近寄ったノラの頬を撫で首を抱く凜。

橘と牧野が近寄ってくる。

牧野「(橘の耳元で) やっぱり、僕に逢いた

くてすぐに来たんですよ、高本は」

橘「そうか、良かったな。平山は？」

牧野「(憤然と) 平山さんひどいです。全然

来なかつたんですよ、初日から。僕にひ

とりでやれつてことですか！」

橘「ずっとお前一人でやったのか？」

牧野「おやじに電話したら、アルバイトや

とつてくれて、三人手伝つてくれたんで

す」

橘「そりゃ、ご苦労だったな。お前には力

二味噌せんべい買つて来たから」

牧野「せんべいじゃなくて、かに買つて来

て下さいよ」

橘「金持ちはかになんか食い慣れてるだろ」

凜はノラを優しく撫でる。

○同・馬場（早朝）

馬に乗った一年生が輪になり、中心部に立つ松田、橘。

松田「長い休憩の後で、馬は力がありあまつているからな、前に出るのを抑えて乗れ」

一斉に歩き始める馬。

早足になり、駆け足になり、一年たちには進歩した様が見える。

ノラは頭を下げ、美しい姿勢で走っている。

松田「そのまま、河田から障害を跳べ！」

河田から順に障害物を跳び、皆、跳び終える。

橘「（松田に）やっぱり夏の合宿以降は断然力が変わってくるな」

○同・厩舎・前（夕）

馬たちは厩舎内に入っている。部員たちが集まり、地面に座る。

瀬田コーチ「九月に入ったら全国学生馬術大会だ。明日から絶対に休むな。それで一つ、提案があるんだが。この度の大会では松田と橘にもマッキーで試合に出させたいんだ。牧野、いいか。勿論お前にもマッキーで出てもらうが」

牧野「そんなことしたらマッキーが潰れますよ、一つの試合で三回も走ることなんか無理です」

コーチ「二人は今期が最後の試合だ。是非とも上位に入賞させてやりたい」

牧野「そんなあ、僕の馬なのに」

橘「コーチ、僕はスイに乗って試合に出た

いと思っています」

コーチ「しかし……スイでは……無理だぞ」

橘「そうさせて下さい」

コーチ「松田はどうする?」

松田「(考え) マツキーでお願いします」

コーチ「牧野、いいな」

牧野「(渋々) はい。松田さん、乱暴に乗ら

ないで下さいよ。弁償ものですよ」

松田「判ったよ」

コーチ「高本は新人戦は別の馬で出る」

凜「(反論できない) ……」

橘「高本はノラがいいと思います」

コーチ「ノラは環境が変わったらいつても以

上に興奮する、抑えられるか?」

凜「……はい」

橘「僕もついておきます」

コーチ「そうだな。ずっと乗って来た馬だ

からな。明日からは最終調整に入る」

部員たちの顔が引き締まる。

○同・馬場(早朝)

コーチの大声で号令がかかり、部員
全員に緊張感が漂う。

騎乗した一年生たちが障害の前で止

まっている。

コーチ「河田から!」

河田「はい!」

河田から障害を跳ぶ。上園、美優、

芦田が跳び、最後に凜が位置につく。

凜「(ノラに) 行くよ」

お腹を蹴る。

ノラが走り出す。

障害を跳ぼうとした瞬間、一瞬、凜の身体が揺れる。

ノラは障害を跳ぶが、丸太に足をひっかけ、凜もろとも横倒しになる。

ノラは素早く立ち上がろうとするが、倒れたまま動けない。

ノラは悲痛な鳴き声を上げる。

凜「ノラ！！」

ノラは必死で立ち上がる。

ノラの右前脚がぶらりとぶらさがっている。

凜「ノラ」

松田、橘が駆け寄る。

松田「だめだ、折れてる」

凜は立ち上がろうとするが倒れる。

橘「お前も足が折れてるんじゃないのか？」

ノラの悲痛な鳴き声が馬場に響く。

凜「ノラ、ノラ（叫ぶ）」

橘（松田に）日下先生に来てもらう。高本は病院に連れて行く」

橘は凜を抱き上げる。

凜「私はどうでもいいです。ノラのそばにいます。降ろして下さい」

橘「お前はいいんだ」

凜「お願いします。戻って下さい」

橘は凜を抱きしめ歩く。

暴れる凜。

凜「お願いします。ノラの傍にいさせて下さい、先輩お願いします」

橘「（あまりの暴れぶりに）わかったよ」

ノラの元に戻り、凜を降ろす。

凜「ノラ、ノラ」

ノラは凜の傍に足を折って転がる。
ノラの首を抱きしめる凜。

日下は橘の耳元で何か囁くとすぐに
その場を立ち去る。

橘「俺が連れて行くから」

凜「どこですか？」

橘「仕方ない。足の折れた馬がどうなるか

は決まっているんだ」

凜「先輩、お願いです。ここで私がずっと

面倒をみます」

橘「犬や猫と違うんだ。動けなくなった馬

ほど不幸なものはない。だからこそ尊厳

を考えてやらなくてはいけない。静かに

死なせてやろう」

凜「いやです(叫ぶ)」

橘「俺が連れて行く。最期まで見届ける、

生き物を扱う人間はそれをしなきゃいけ

ないんだ」

○同・厩舎前(朝)

誰ひとり話すこともなく部員たちは
鎮痛な面持ちで馬の手入れをしてい
る。

○同・馬場(朝)

横たわったノラとノラの頭を膝の上
に載せた凜だけが太陽に焼かれてい
る。

獣医の日下を連れられた橘が近寄って来
る。

日下が足を触る間、凜はノラの首を
押さえる。

凜「私がどこか引き取ってくれるところを

探します」

橘「そんなところはない。静かに逝かせて

やる勇気も必要なんだ。生き物に敬意を

持とう」

凜は気を失う。

○笹沢病院・病室（夕）

テレビの音で目を覚ます凜。

二人部屋の病室。

隣ベッドの中年女性はテレビに熱中。

凜は起き上がり、ベッドから降りる。

足にはギブスがはめてある。

○函館競馬場・厩舎・前（夜）

部員達が作業している。

スイの手入れをする橘と美優。

美優「最期に一目会わせてあげることでき

ないんですか？」

橘「病院にいる方が高本のためにはいい」

美優「可哀想。あんなにかわいがってたのに」

橘「（遮り）なあ、後は一人でできるか？」

美優「……やります」

橘「悪いな、ちよつと出かけてくる」

橘は走ってその場を立ち去る。

○笹沢病院・廊下（夜）

松葉杖をつき、隠れるように歩く凜。

○函館競馬場・厩舎・中（夜）

静かに扉が開き、暗闇に月光が入る。

月光を背に松葉杖の凜が立つ。

凜「(小声で) ノラ」

びくっと動く音がする。

杖を使いノラの馬房まで歩く凜。

横たわったノラと見つめ合う。

凜「(ノラに近づきながら) ノラ、ごめん」

ノラは鼻をふるふると鳴らす。

ノラの傍に寄り添う。

凜はノラの首を抱きしめ、ノラは凜

の膝に頭を載せる。

× × ×

外は白み始めている。

人の足音で、ピクっとノラの耳が動

きノラは頭を上げる。

眠っていた凜も目を覚ます。

松田が厩舎に入ってきて来る。

松田「(驚愕し) 高本、お前、何してる」

凜はノラを庇うように手を拡げる。

病院着のままの凜の姿。

松田「これ以上、困らせるな。お前はよく

ノラに乗ってやった(涙ぐんでいる)」

ノラが立ち上がる。

トラックが馬場の前に止まる音。

凜「うそ、うそですよね」

松田「長引かせてもいいことはない」

凜「止めて下さい。私がどうかします。

お願いです」

松田「きりががないよ、高本」

橘が入ってきて来る。

橘「高本……」

凜の目から涙が溢れる。

橘は無言でノラに手綱をつけ、馬房

から出す。

凜は追いかけてようとするが、松田が凜の腕を掴む。

凜「ノラ！」

ノラは凜を振り返る。

凜「ノラ！！」

凜「ノラ！！」

凜はトラックを追いかける。

凜「ノラ！！」

ノラの大きな切ない鳴き声。

転倒する凜。

泣き崩れる凜。

手で頭を覆い、転がるように泣く。

苦しい表情をして凜を見つめる松田。

○同・厩舎前の道路（朝）

ノラは抵抗せずにトラックに乗る。

自分の最期が判っているかのように。

松田に掴まれた腕をほどき、びっこを引いて厩舎から飛び出す凜。

○同・馬場（早朝）

俯瞰。

騎乗し練習する部員たち。

松田「苦しまないように安楽死させてやろう。な、それがノラのためだ」

凜「いやだ。いやだ、いや〜！！」

トラックがエンジンをかけ発進する。

荷台からノラの鳴き声が聞える。

○函館大学・講義室

麗奈が一人で授業を受けている。

○同・廊下

一人で歩く麗奈。

麗奈「何か判ったら、連絡して」

美優「うん」

○同・講義室

麗奈が入口の前で美優を捕まえる。

麗奈「ね、凜に何かあった？夏休みが終わって連絡がとれないのよ。家も知らないの」

○凜の部屋・室内（夕）

凜はベッドの上に転がっている。

目の端から溢れる涙が止まらない。荒れ果てた室内。

美優「凜ちゃんの大切にしてた馬が死んじ

やったの（涙ぐむ）」

○高本家・凜の部屋（回想一年前）

カーテンを閉めた隙間から太陽の光。

麗奈「（衝撃を受け）……………うそ…」

凜（18）は床に座っている。

美優「凜ちゃんも足を折って、暫く入院してただけど、今は解らない」

志乃の声「凜、開けなさい」

麗奈「……………実家に帰ってるのかな」

志乃（70）の声に驚くが動けない。

美優「部のみんなも心配してるんだけど、そつとしておこうって、連絡つかないし」

ーで扉が叩き壊される。

ハンマーを持ち、立っている志乃。

志乃「いい加減にしなさい」

部屋に置いてある水槽をハンマーで叩き割る。

凜「きやー止めて」

割れた水槽から水が飛び散る。

亀が床に転がり落ちる。

志乃「周りを巻き込むのは止めなさい。家族がどんなに苦しんでいるか解らないの？」

志乃の目から一筋の涙が溢れる。

裏返った亀が足をばたばたさせている。

志乃「みんながそういう状態なのよ、あなた
たのせいで」

凜は亀を手を取ろうとする。

志乃はハンマーを降ろさない。

志乃「おじいさんだつて、凜のこんな姿を見たら嘆き悲しむ。部屋から出なさい、学校に行けとは言わないから」

亀をつかむ志乃。

○渋谷東高校・教室内・(回想二年前)

凜(17)が教室に入ってくると周囲からくすくすという笑い声。

凜「(親友の優花に) どうしたの？」

優花「さあ」

凜「帰りにツタヤ寄りたいんだけどいい？」

優花「行かない」

凜「え？(笑いながら) どうしたの？」

凜は鞆が無いことに気づく。

ニタニタして見ている優花。

一人の女生徒一が窓の外を指差す。

のよ、バーカ

凜「なんで？」

凜は救いを求める目で橋爪を見る。

優花「さあ」

橋爪は凜を一瞥しただけで自分の席

女生徒一が教科書を持ち、ひらひらさせる。

に戻る。その背中は凜を拒絶している。

凜「！」

凜の頭にごみくずが飛んでくる。

別の女生徒二が教科書を受け取りびりびり破り、窓から放り投げる。

ゲラゲラと笑い声が響く。

橋爪が入ってくる。

○凜の部屋・ドア前（夕）（回想前に戻る）

橋爪は自分が注視されていることに気づく。

河田が深呼吸をし、扉を叩く。
河田「高本さん、河田やけど」

橋爪「……」

何の返答もない。

優花「中学のときから親友面して人のものを欲しがるとだよね」

河田「高本さん、聞いて欲しいんや」

を欲しがるとだよね

深呼吸する河田。

凜「…応援してくれてたんじゃないの？」

河田「僕、大学を止めて大阪に帰ることに

優花「なんでそんなことしなきゃいけない

したんや。明後日の馬術大会の新人戦に

出たら函館ともお別れや。大阪から憧れの函館に来れたけど家業を継ぐことにしたんや。うちには年季の入ったねえちゃんがおんねんけど母親を手伝って豆腐屋

やってるうちに、嫁にいきそこなつて、それでも者好きな男はんが嫁にもろうて

やつてもええいうてくれてるらしゅうて、それ逃したら、もうお終いや。そやけど

姉ちゃんは僕が卒業するまでは豆腐屋をやる、いうて聞かんからな。浪花節みた

いやけど、僕が帰ることにしたんや。僕はな、大学も馬術部も好きやつた。高本

さんには、馬術を棄ててほしくないねん。時間がかかってもええから馬術部に戻っ

て来て欲しいねん。あんたは馬術部にむいてるねんで。僕の代わり言うたらなん

やけど、馬術部で一花咲かせて欲しいねん」

○同・中(夕)

ドアの前に立っている凜。

頭を垂れ、河田の話しを聞いている。

○同・ドア前(夕)

河田はドアに手を当てる。

河田「僕の最初で最後の告白やけど、僕はあんたが好きや。あんたの心の中には僕はおらんことは判ってるけど、そんなもんや、恋っていうのは。それでええねん。恋は楽しかったで。おおきに。告白したら、なんやすすきりした。函館の恋や」

○同・中（夕）

ドアの前で拳を固く握り、肩を震わせ、声を殺して泣く凧。

○函館競馬場・厩舎内（夜）

空になったノラの馬房の前に立つ橘。

牧野が近づいて来る。

牧野「いなくなったら変な感じですよ。ノラ

も人格、変わったしな。人格じゃないか」

橘「……」

牧野「高本、大丈夫かな。僕が行ってやっ

た方がいいんじゃないかな」

橘「……」

○松田の下宿部屋（夜）

食事する松田と真琴。

真琴「松田君、ちゃんと気分を入れ替えて、

試合頑張らなきゃだめよ」

松田「そうだな」

きんぴらごぼうに手をつける。

○凧の部屋・ドア前（夜）

橘が立っている。

暫く躊躇するが、扉を叩く。

橘「高本、橘だ。裏の公園まで出て来い。

待ってるから」

○公園（夜）

ベンチに座っている橘。

凧がゆっくりと近づいて行く。

○大学前・喫茶店（夜）

無言で食事する美優と芹田。

橘は「よお」と手をあげる。

一礼する凜。

橘「夕方、河田が行ったか？」

凜「……はい」

橘「このまま馬術部を辞めるのか？（返事を待たず）

明後日からの大会を見に来い。

必ず、来い。僕の最後の大会だ」

橘は凜の手を握る。

橘「見に来て欲しい」

凜「……」

橘「僕はスイに四年間乗ってきた。今度の

大会が乗り治めだ。スイはどん臭い馬だ

った。でも今はある程度までにはなった

と思う。それをお前にも見て欲しい」

凜「……」

橘「高本、僕がなぜ、お前にノラを任せた

か判るか？」

凜「……」

橘「ノラはどうしようもない馬だった。凶

暴だったから虐待された。正直、この大

学に来た時も皆が迷惑がった。誰にもな

つかず、だから余計に嫌われる。お前に

似てると思った」

凜、橘の横顔を見る。

橘「（笑いながら）悪い、悪い。お前、馬術

部に入った頃は馬術部なんか大嫌いオー

ラが出てたぞ。何かに腹をたてて、世の

中斜めに見てるみたいで、人を拒絶して、

それでも何かに打ち込まなくてはやって

られない感じだった」

凜「……」

橘「だから、お前だったら、ノラとうまく

やっていけるかもしれないと、可能性をかけたんだ。思った通りだった」

凜の目から涙が溢れる。

橘は凜を引き寄せ、抱き締める。

橘の胸の中で堰を切ったように凜は慟哭する。

橘「もう泣くな、もう泣かなくていい。もう苦しまないでくれ」

凜は泣きやまない。

○函館競馬場・レース会場

全国学生馬術大会の看板。

観客席には大勢の観客が座っている。

松田、橘、真琴、ゆかり、麗子、牧

野が座り、競技を見守っている。

麗子はストップウオッチを持ち、タ

イム表をつけている。

河田がメグで障害を跳んでいる。

最終障害まで無事に跳ぶ。

大きな拍手を送る六人。

真琴「芦田君は次の次」

牧野「タイム悪いな」

松田「新人戦で最後まで跳んでるんだからたいしたもんだ」

牧野「甘いですね、僕が次期部長になったらみんなをすごいて上位に連れてやりますよ」

真琴「その前に部員がいなくなったりして」

麗子「高本さんにも出させてやりたかった

ですね、あんなに頑張ってたのに」

牧野「僕が部長になったら戻って来ますよ」

麗子「あ、芦田君の番です」

芦田が緊張した面持ちで挨拶をする。

橘が入って来るのが見える。

部員からの死角に凜が身を隠して座

真琴「あゝ、橘君にも頑張って欲しいなあ」

り、レースを見守っている。

次の学生は落馬する。

凜は身を隠して観客席の端に座る。

○同・公園

橘を見つめる凜。

ベンチに一人座り青空を見上げる凜。

橘は凜を探すように観客を見渡す。

客席の部員たちは橘に手を振る。

○函館競馬場・レース会場

橘は手をあげる。

松田がマッキーで障害を跳んでいる。

凜は橘に見えないように小さくなっ

小回りをしてマッキーは俊敏に走る。

ているが橘が振り向いた瞬間に目が

客席の真琴、ゆかり、麗子、一年生

合う。

が大きな拍手を送る。

微笑む橘。

麗子「松田さん、牧野のタイムより速い」

うつむく凜。

真琴「きゃ〜!!!」

アナウンス「最終走者は七十五番、函館大

麗子に抱きつく真琴。

学の橘蓮君です」

ゆかり「橘君、スイで大丈夫かしら」

スタートラインに立つスイ。

合図とともにスイを走らせる。

スイは橘と一体となり、見事な走りを見せ、障害を跳び終える。

ゴールした瞬間の客席の歓声。

麗子「(ストッププウオッチを見て) 橘さん、

三位入賞です!!」

真琴「松田君は？」

麗子「(タイム表を見比べ) 四位です」

真琴「二人とも入賞したんだ!!」

麗子「牧野は、六位です」

真琴「みんな入賞した! 凄い」

真琴、ゆかりが立ち上がり手を振る。

松田はガッツポーズをする。

橘は凜が座っていた席を見るが、凜

は姿を消している。

○函館大学・講義室

凜が授業を聴講している。

隣の麗奈が凜の様子を気にしている。

麗奈「(小声で) 水臭い」

凜「……ごめん」

麗奈「友達よね、私たち」

凜「うん」

麗奈「私はそんなものかと落ち込んだ」

凜「ごめん」

麗奈「友達というもんを見切っちゃだめ」

凜「うん。ありがとう」

麗奈「もう、戻らないの? 馬術部」

凜「もう勉強にいそしむ、大学生らしく」

麗奈「似合わない、そんなの」

凜「麗奈と合コンに行く」

麗奈「それも似合わない。凜は馬と一番ウ

マが合ってる」

立ち上がる。

凜「……もう、馬には近づかない、二度と」

麗奈「何？何？大丈夫？」

麗奈「ねえ、あそこに立ってる人、こっちをじっと見てるけど、もしかして馬の人

凜「かなり周りに迷惑かけてるみたいだから」

じゃなかった？」

麗奈「後で必ず連絡して」

前方入口の前に橘が立っている。

凜はすっかりとうなずく。

学生の目が一齐に橘の方を向く。

その視線に気づき、教授も橘を見る。

○電車・車中

教授「(橘に)何か？」

向かい合って座る凜と橘。

橘「急用で高本凜に用事があります」

橘「こうでもしないと、お前がついて来ない

教授「急用？」

いと思ったから」

橘「家族のことで急用です、早退させます」

凜「どこに行くんですか？」

教授「この中に高本凜さんはいるかね？」

橘「行けば判る」

戸惑い、手を上げる凜。

凜「……(思い出したように)おめでとう

教授「急用だそうだが」

ございました」

凜「すみません」

橘「見に来てくれてありがとう」

凜「ちよつと感動しました」

橘「うん。僕も感動した」

凜「観に行つてよかったです」

橘「よかつた」

息を整えるように深呼吸する橘。

橘「あのな、僕、母親いないんだ」

凜「え…？」

橘「十二歳の時に死んで、父親と二人で暮

して来た。僕な、平山ゆかりが好きだった」

凜「……」

橘「ゆかりは親切にしてくれた。女のそん

な愛情を受けたのは初めてだったから、

ゆかりが当然のように好きになつた」

凜「……」

橘「でも、ゆかりの愛情は同情に似た愛情

なんだ、僕を好きな訳じゃない。あいつ

は松田が好きなんだ」

凜「……」

橘「松田は裏表がなく、真つすぐな奴だ。

親の愛情をたつぷり受けて育つて来て。

僕は好きな女が他の男を好きでも、それ

でも良かつた。二番目でも三番目でも。

負け惜しみでも何でもなく松田だったら

仕方ないと思えた」

凜「……」

橘「でも、今は違う。お前の前では、俺は

一番になりたかつた」

凜「……」

橘「合宿でお前が馬を疾走させた時、僕は

河田と競い合つた。河田は必死だった。

あの時、判つたんだ、一番になりたいって」

凜、うつむいて何も言えない。

橘「僕、よくしゃべるな、恥ずかしい」

○バス・車中

山道を走る。

速いスピードのため、四人の乗客は

縦横に揺れている。

並んで座る橘と凜も揺れる。

橘「何か話してくれよ」

凜「……私、一年間、引きこもっていました。

私の身にも起こったんです。嘘みたいな

いじめ。テレビでよく観るいじめでした。

中学からの親友が発端で凄まじいいじめ

でした。毎日に神経が壊れていくのがわ

かるんです。自分が悪いと思うようにな

るんです。鍵をかけて部屋にこもって外

の空気を吸えなくなりました。家族はう

ろたえていました」

橘「そういうことだったのか。よく立ち直

ってここまで来たな」

凜「一年経った頃、病に臥せっていた祖母

がハンマーを持って現れたんです。弱弱

しかった祖母がドアを叩き割って、小学

生のときに祖父に買ってもらった亀の水

槽も割ったんです。凄く怖かったです。

もがく亀を見て『凜のせいでみんながこ

うなっている』って言われました。祖母

は一週間後に亡くなりました。亀も同じ

日に」

橘「辛かったな」

凜「親友からのいじめなんて今はどうでも

いいんです。ただ大切な祖母と亀吉を死

なせてしまったことが何よりも苦しかつ

た」

橘「お前のせいで亡くなった訳じゃないだろう。それはお前も解っているんだろう。わざわざ結びつけて自分をいたためつけているだけだ」

凜「妹はいまだに私を怖がっています」

橘「それは時間が解決するよ。それにお前は頑張ってきたじゃないか。大学に入つて、馬術部で毎日汗を流して、お祖母さんと亀がお前を助けてくれたんだ。なのに腐つてどうする」

凜の目から涙が溢れる。

凜「でもノラのことですいません。私がかかわってはいけないんだと。関わりと死なせてしまうと、大切なものは失うものなんだと」

アナウンス「次は高山牧場です」

橘「降りるぞ」

橘は凜の手を取り、停車したバスから降りる。

○高山牧場

壮大な牧場が広がる。

息をのむ凜。

橘は凜の手を引いたまま進む。

多くの馬が柵の中で草を食べている。

一頭の青毛の馬が離れた所にいる。

橘「あの馬、ノラに似てるだろう」

じつと見る凜。

橘「ノラの兄弟だ」

凜「え?!」

橘「ノラはここで生れたんだ」

凜「本当ですか？」

橘「ああ」

凜「(涙ぐむ)……」

橘は凜の手を引き、厩舎の方に。

○同・厩舎内

数十頭の馬が馬房の中に立っている。

橘は一番奥の馬房に凜を連れて行く。

そこにはノラが立っている。

凜「……(橘の顔を見て)ノラ？」

凜はノラに走り寄ると、ノラも足を

引きずりながら、凜に近づく。

振り返り、橘を見る凜。

橘「ノラだよ。このオーナーが引き取っ

てくれた。走れるようになる訳じゃない

けど歩けるようにはなる」

高山の声「やーやっと連れて来たか」

橘「今、話したオーナーの高山さんだ」

凜は近づいて来る高山に頭を下げる。

ハンティング帽を被った高山は真っ

黒に日焼けした顔に白い歯を出して

人の良さそうな笑顔。

高山「このお嬢ちゃんがノラの飼い主か。

ノラをかわいがってくれたみたいであり

がとう。ノラはどこに行っても嫌われ者

でな。この前、夜、橘君が訪ねて来てノ

ラとお嬢ちゃんのことを切々と訴えるん

だ。僕もうるつと来ちゃってね。で、手

術することにした。実際、ノラの性格が

変わってるのを見て正直感激しちゃって

ね。だから手術費や飼育費は君たちの手

伝いで相殺することにしたんだ。月に五

回はここに来てもらおうよ」

凜「ありがとうございます。本当にありがとうございます
とうございます」

ノラは凜の顔に鼻をこすりつける。

凜「先輩」

橘は凜の肩を抱く。

橘「やつぱり、お前とノラはいいコンビだな」

凜「先輩」

橘「早く見せたかった」

高山「ノラの弟、見た？」

凜「はい。見ました」

高山「乗ってやってよ。あいつも性格が少し歪んでるんだ。大学でひきとってもらったからお嬢ちゃんになつくような気がする。兄弟でかわいがってやって」

○大平原（最初のシーンと同じ場面）

青い空と秋色の平原が凜か彼方で重なり合う。

一頭の青毛馬に乗った女が駆ける、その後ろ姿。

馬を止め、女が振り返る。

女は凜である。

背後から馬に乗った橘が追いかけて、凜の側で止まる。

了

本電子書籍は、2016年12月9日発行の『第22回函館港イルミネーション映画祭2016 第20回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第22回函館港イルミネーション映画祭2016

第20回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

駆けろ！駆けろ！駆けろ！

作：難波 典子

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2017年2月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
